

17) 婦人科領域癌組織内照射 2 例の治療経験

稲越 英機・北村 達夫  
 斎藤 真理・伊藤 猛  
 松月 由子・土田恵美子  
 酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)  
 北川 俊夫 (栃木県立がんセン  
 ター放射線治療部)

新潟大学病院では 1984 年 6 月に密封小線源治療病室が開設され、婦人科領域癌では計 10 例に組織内照射を実施した。この中 5 年以上経過した 2 例を供覧した。

症例 1：陰癌 T2NOMO(II), 78 歳。外尿道口周囲にも浸潤する膣入口部前壁の 3 cm 径腫瘤に対し、セシウム針 9 本 (42 mCi) で 60 Gy を照射した。後方白板症部分も含む照射のため膣狭窄を認めるが、再燃を認めず 7 年生存中である。

症例 2：子宮体癌術後傍膣断端再発, 75 歳。膀胱、直腸および腹膜に接する直径 2 cm の球形硬腫瘤に対し、Au グレイン 16 個 (80 mCi) を経膣的に刺入した。一部の線源は基韧带基側にやや離れたので、2 カ月後縮小腫瘤に 4 個追加刺入し、計 70 Gy を照射した。再燃や副障害を認めず 5 年生存中である。

組織内照射により、これら 2 症例では比較的良好な結果が得られた。本治療法は局所制御に優れるので、婦人科領域癌の場合にも適応を選び積極的に本法を実施すべきである。

18) 表層上皮性・間質性卵巣癌 I, II 期の治療成績

中村 稔・吉谷 徳夫  
 本間 滋・児玉 省二 (新潟大学産科婦人  
 科学教室)  
 金沢 浩二・田中 憲一 (新潟大学産科婦人  
 科学教室)  
 高橋 威 (県立ガンセンター  
 新潟病院産婦人科)  
 須藤 寛人 (長岡赤十字病院  
 産婦人科)  
 徳永 昭輝 (新潟市民病院  
 産婦人科)

当科および関連病院において、昭和 56 年 10 月から昭和 62 年 9 月までの 6 年間に集積された既往治療歴のない新鮮卵巣癌 (原発表層上皮性腫瘍の悪性群のみ) 115 症例のうち、I, II 期の治療内容と再発症例の臨床経過を検討した。腹腔内所見より I, II 期と判断した 59 症例のうち、大網切除を施行した 45 症例中 2 症例 (4.4%) に、所属リンパ節を検索した 34 症例中 8 症例 (23.5%) に転移を認め、最終的にそれぞれ III a, III c 期とした。I 期では、36 症例中 36 症例 (100%) が肉眼的に完全摘出と

判断され、II 期では 13 症例中 10 症例 (76.9%) が完全摘出、3 症例 (23.1%) が癌塊遺残 ≤ 2 cm と判断された。術後化学療法は、原則として FCAP (一部に FAMT) 併用療法が施行され、SLO は 31 例 (63.3%) に行われた。再発は I 期 5/36 (13.9%: 全例 I c) 例, II 期 3/12 (25.0%: II b 2 例, II c 1 例) 例に認められ、その予後は不良であった。再発症例の多くは、分化度の悪い漿液性、明細胞腺癌で、被膜破綻 (+) あるいは腹腔細胞診陽性例であり、SLO 施行例は 2 例でいずれも陰性であった。再発までの期間は 4 ~ 42 ケ月 (平均 22 ケ月) で、再発部位は骨盤内が 6 症例、傍大動脈リンパ節が 1 症例、肺が 1 症例であった。妊孕能保存手術を行った症例は 7 例 (I a 期 2 例, I c 期 5 例) あり、それらは高分化の粘液性、類内膜腺癌で、SLO による確認がされており、再発はなく、2 例は妊娠・分娩を経験した。

19) 術前、小腸腫瘍と診断された膀胱癌の 1 例

真部 一彦・尾池 文隆  
 長谷川正樹・高木健太郎 (新潟県立中央病院)  
 山崎 信保・小山 高宣 (外科)  
 内藤 彰・畠山 重秋 (同 内科)

今回我々は、消化管出血の精査で小腸原発の悪性腫瘍と診断され、切除標本の病理学的検索で膀胱癌と診断された一例を経験したので報告する。

症例は 72 歳女性。1990 年 6 月頃より肉眼的血尿があり、泌尿器科で精査。膀胱癌が疑われたが、確診がつかず経過観察中、1991 年 8 月頃貧血高度となり、精査のため入院となった。便潜血反応陽性で、CT、小腸造影、血管造影の結果、小腸原発の悪性腫瘍の診断で、手術を施行した。Treitz 靭帯から約 80 cm の空腸に手拳大の腫瘍を認め、空腸、膀胱壁に浸潤していた。リンパ節は大動脈周囲まで腫脹が認められ、Reduction 目的で腫瘍を栄養する空腸動脈根部まで切除した。病理学的検索では、膀胱粘膜面では直径約 3 mm にすぎないが、粘膜下へ浸潤し、小腸への浸潤と高度のリンパ管侵襲とリンパ節転移を有する扁平上皮癌であった。術後膀胱炎症状が続いたが軽快。現在外来にて経過観察中である。